

第 17 期災害救援ボランティア上級講座 地域連携プログラム③

科目「地域における防災教育の実践に関する手引き」テキスト

一般社団法人防災教育普及協会 事務局長
災害救援ボランティア推進委員会 主任
宮崎 賢哉（防災教育コンサルタント・社会福祉士）

本テキストは災害救援ボランティア推進委員会が認定する「地域防災インストラクター」養成のために作成したものです。広くインストラクター希望者にご利用いただくため、全文を災害救援ボランティア推進委員会ホームページ内「防災ミニ講座」で公開しています。本文の一部リンクはホームページにアクセスすることで利用できます。

災害救援ボランティア推進委員会『防災ミニ講座』 http://www.saigai.or.jp/info/category/mini_course

1. 地域における防災教育の実践に関する手引きとは

「地域における防災教育の実践に関する手引き」は、平成 27 年 3 月に内閣府(防災担当)が公開した冊子です。内閣府(防災担当)は、2004 年度から防災教育の専門家や有識者と共に『防災教育チャレンジプラン』という防災教育支援事業を実施しています。防災教育チャレンジプランの支援によって、数多くの学校や団体が防災教育を実践し、様々な防災教育プログラムや教材が開発、使用されました。東日本大震災後、防災教育の象徴的な事例として取り上げられた岩手県釜石市立釜石東中学校も、同プランに採択されていました。



こうした豊富な事例や教材を整理し「防災教育にチャレンジしたいけれど、何からはじめ、どうしたらいいかわからない」方々、特に地域で学校の防災教育に関わる立場の方々に向けて作成されたのがこの手引きです。

本テキストは、筆者が手引き作成時の事前ヒアリング調査や項目分類、関係団体への防災教育実践等にご協力させていただいた経験から、手引きをより効果的に活用するためのポイントや、掲載されている代表的な教材などについて、手引きの構成を中心に取り上げ、各項目についてご紹介します。

地域・学校における防災教育実践の一助となれば幸いです。

関係リンク

- 内閣府(防災担当)『地域における防災教育実践の手引き』[本体](#)
- 内閣府(防災担当)『普及・啓発のページ』
- 防災教育チャレンジプラン(防災教育に役立つリンクを含む)
- 一般社団法人防災教育普及協会(今後、研修・イベント・教材等を紹介予定)
- 先生のための教育事典 EDUPEDIA『防災教育特集リニューアル』

2. 手引きの概要

(1) 背景と目的

「我が国では、毎年、地震や風水害など、多くの異常な自然現象が発生しており、これらの自然災害による被害を小さくするためには、「自助」、「共助」、「公助」の取組が重要です。平成23年3月11日に発生した東日本大震災では、大規模広域災害時における「公助」の限界が明らかになった一方で、「自助」、「共助」の重要性が再認識され、これをきっかけにして、「自助」、「共助」の力を向上させる取組として、防災教育への関心が高まっています。しかし、何から始めればよいかわからない、活動を行うための資金や知識がないなどの様々な課題により、取組が進まない事例が存在します。本手引きは、このような状況を踏まえ、全国各地で防災教育を推進することを目的として、優秀な先進事例から得られる取組を進めるための知見を整理し、防災教育を実践する過程で生じる様々な課題を解決するためのヒントを示すものです。」 - 本体より引用 -

(2) 手引きの対象

教育・福祉関係団体(学校、幼稚園、保育施設など)に限らず、地域住民団体、ボランティア団体、地方公共団体などにおいて、これから防災教育に初めて取り組もうとする方が主な対象になっています。

(3) 防災教育を実践するにあたって

(a) 防災教育の目的

『地域に属するひとりひとりの防災意識の向上を図り、地域内の連携を促進することなどにより、地域の防災力(災害を未然に防止し、災害が発生した場合における被害の拡大を防ぎ及び災害の復旧を図る力)を強化すること』が防災教育の目的として示されています。必ずしも対象は児童生徒だけではありません。

(b) 防災教育を実践する上での五箇条

①地域の特性や問題点、過去の被災経験を知ること。

防災教育を実践するにあたっては、まず地域の脆弱性(過去にどのような災害が発生し、どの程度の被害が出ているか等)を把握し、想定される災害リスクを的確に捉えることが必要です。また、自然を「過去に大きな災害もたらした恐怖の対象」としてだけ捉えるのではなく、その自然が与えてくれる美しい景観や様々な恵みについても、併せて把握することが大切です。

「自然災害によって被害を受ける」ということは「問題点」かもしれませんが、一方で日常的にたくさんの恩恵も受けている、という自然の二面性について理解を促すことも、防災教育の大切な役割のひとつです。

②まずは行動し、身をもって体験すること。

防災教育を実践しようと思う方は、まずは自ら行動に移し、周囲にその必要性和成果を示すことが重要です。防災対策や防災教育の必要性は理解しつつも「具体的にどうしたらいいのかわからない」あるいは「他に優先してやらなければならないことがある」という理由から、なかなか具体的な実践に結びつかないことがあるかもしれません。

そうした場合は例えどんなにわずかな、初歩的な取り組みだとしても、誰かが行動を起こすことが重要です。後述するように、この手引きには楽しみながら気軽に取り組める教材やプログラムについての情報も掲載されています。まずは実践したいと思う方が、自ら身をもって体験し、チャレンジしましょう！

③身の丈に合った取組とすること。

決して無理をせず、欲張らず、自分たちのできる範囲で取組を進めることです。手引きやインターネットにはさまざまな防災教育実践が掲載されています。ただ①で紹介したように防災教育はそれぞれの地域特性などに応じた実践が必要です。別の地域、別の学校で取り組まれた内容がそのまま適用できるとは限りません。優れた実践は、様々な実践を積み重ねて成果を挙げています。焦らず、少しずつできるところからはじめ、継続していくことが大切です。

④様々な立場の関係者と積極的に交流すること。

防災教育、そして実際の災害発生時に関わるのは学校と児童生徒だけではありません。消防や防災課、NPO や民間企業・団体、自主防災組織、家庭など、周囲の関係者と協力・連携することが重要です。積極的な交流のなかから新しい知見が生まれ、より効果的な実践につながります。

いきなり交流するのが難しいと感じる場合は防災教育チャレンジプラン・防災教育普及協会が主催する「防災教育交流フォーラム」などのイベントに参加し、同じ目的や課題を共有する実践団体と交流してみるのも良いでしょう。皆さんと同じような課題を持ち、また解決に向かって取り組む「仲間」が見つかるはずですよ。

⑤明るく、楽しく、気軽に実行すること。

最後は、日常生活の中で気軽に継続できる取組を進められるよう、楽しみながら実践することです。防災教育は目に見える成果が出にくいものです。それでいて、長期間に渡って地道な継続が求められる取り組みでもあります。「やらなければならない」という想いだけが強くなってしまうと、自分も周囲も続けるのが苦しくなってしまいます。明るく、楽しく、気軽に実行することからはじめてみましょう。

(4)防災教育を実践する上で重要な18のポイント

(a) 3つの段階

防災教育実践には3つの段階があります。

【準備】

地域の災害特性や児童生徒の発達段階、学習テーマ、予算、関係団体との調整など、防災教育を実行するまでの様々な準備の段階です。地味で手間のかかる段階ですが、この段階でしっかりと内容を詰め、関係者と調整を行っておくことがこの後の実行や継続に影響します。じっくりと時間をかけて準備しましょう(初めてチャレンジされる場合の目安としては実際に授業を行う2~3ヶ月前からの準備をオススメしています)。

【実行】

防災教育を実践する段階です。準備してきた内容に基づいて実践します。うまくいかないことがあるかもしれませんが、前述のように「まずは身をもって体験する」ことが重要です。しっかりと準備をしていれば、大きな失敗をすることはないかと思いますが、それでも「思ったより時間がかかってしまった」とか「うまく伝えたいことが伝えられなかった」「児童生徒が興味をもって参加してくれなかった」などが課題になることもあります。

実践の成果を正しく評価するためにも、振り返りシートやアンケートなど実践結果を確認できるような準備をしておくことも大切です。

【継続】

準備し、実行したら次は「継続」です。同じ対象(同じ児童生徒)に繰り返し防災教育を実践することは難しいかもしれませんが、同じ地域、同じ学校等で継続することが重要です。また、継続するためには【担い手】や【つなぎ手】を育てていくことも重要です。なるべく多くの人と協力しながら防災教育を実践し、中心的な人物が異動等によって実践に関わるのが難しくなった場合でも、継続できるような仕組みをつくりましょう。予算についても重要で、助成金などをアテにした実施では助成金がなくなったあとがつかなくなります。なるべく経費を抑え、無理のない実践で継続します。

(b) 6つの要素

手引きでは防災教育実践に関わる要素を次の6つで整理しています。

人【担い手・つなぎ手】

防災教育を実践する担い手(教員やボランティア、場合によっては生徒自身も含む)やつなぎ手(実践をサポートしたり、継続的に関わってくれたりする人たち)のことです。「教育は人なり」という言葉がありますが、防災教育もまた同様です。

運営【組織・体制】

防災教育を実践する主体、受ける主体、そしてそれらをつなぐ組織や体制のことです。特に手引きでは地域から学校へのアプローチを大切にしていますので、学校と地域をまきこんでいけるような組織・体制づくりがポイントになります。

場【時間・場所】

防災教育をいつ、どこで実践するかということです。時間は短い場合は数十分、長い場合は数時間まで幅広く対応できるようなプログラムがあると便利です。場は学校が多いかと思いますが、まちあるきなどは地域が場所となることもあります。

お金【資金・経費】

防災教育実践にどの程度の資金・経費が必要かということです。どれくらいが適切か、という基準はありませんが、公的機関やボランティアの方に指導を協力してもらうなど、なるべく支出を抑えた実践が望まれます。単に「節約のため」ではなく「自分たちの責任でやるのだ」という想いをもって準備することがポイントです。

ネタ【知識・教材】

防災教育実践にどのような知識が必要で、どんな教材を使うか、ということです。はじめはなるべくシンプルで、負担のかからない教材を活用していただくことをおすすめしています。下記に手引き本体にも紹介されており、かつ筆者がこれまでの実践経験から「これから防災教育にチャレンジしてみた」方にオススメする「防災教育実践教材7選-小中学校編-」を記載しますので、ご参照ください。

また、手引き本体の巻末には他にも様々な教材やプログラムの紹介ページが、専門家によるチェックのもと、掲載されていますので、併せてご覧ください。

- 1 [ぼうさいダック\(日本損害保険協会\)](#)【災害・危機発生時の安全行動理解】
- 2 [うさぎ一家のぼうさいグッズえらび\(災害救援ボランティア推進委員会,宮崎\)](#)【家庭の備え、グッズの理解】
- 3 [なまずの学校\(NPO 法人プラス・アーツ\)](#)【災害・対応や防災の基本的な理解】
- 4 [災害対応カードゲーム教材「クロスロード」\(内閣府,チームクロスロード\)](#)【コミュニケーション、意志決定】
- 5 [災害状況イメージトレーニングツール「目黒巻」\(東京大学生産技術研究所目黒研究室\)](#)【想像力、気付き】
- 6 [避難所運営ゲーム「HUG」\(静岡県\)](#)【避難所運営、避難生活】
- 7 [ぼうさい探検隊\(日本損害保険協会\)](#)【地域理解、防災マップづくり】

コツ【工夫】

過去に行われた(他の地域も含めて)事例や教訓などから、実践を効果的・効率的に行うためのコツや工夫です。実践内容そのものだけでなく、例えば「まず年度初めに●●の●●さんにあいさつに行って日程調整をしておく」といった実務的なことも重要です。

(C)18のポイント

手引きは、前述の3つの段階と6つの要素を組み合わせた合計18のポイントで整理されています。どの段階で、どんな要素に関連した課題や「つまづき」があるかをイメージしてから手引きを手にとっていただくと、より課題解決がしやすくなります。

段階	要素	ポイント
準備	人(担い手)	①担い手を決める
	人(つなぎ手)	②地域のキーパーソンと連携する★
	運営(組織)	③取り組み主体を組織化する
	運営(体制)	④活動範囲を無理に広げない
	場(時間)	⑤準備時間を確保する
	場(場所)	⑥活動場所を確保する
	お金(資金)	⑦活動資金を確保する
	ネタ(知識)	⑧知識や情報を収集する
	ネタ(教材)	⑨目的に応じた教材(やプログラム)を作成(利用)する★
実行	人(つなぎ手)	⑩経験豊富なアドバイザーを確保する
	運営(体制)	⑪地域の理解を得て関係機関と連携する★
	場(時間)	⑫活動時間を確保する
	お金(経費)	⑬経費を低減させる★
	コツ(工夫)	⑭他の実践団体と交流する
継続	人(担い手)	⑮後任者を育成する★
	ネタ(教材)	⑯知識や経験を形式化する
	コツ(工夫)	⑰成果を外部に発表する
	運営、ネタ、コツ	⑱活動内容を継続的に見直す

3. 手引きを有効に活用するための5つのポイント

以上のように、手引きはこれまで様々な実践を重ねてきた団体を対象に丁寧なヒアリングを行い、18のポイントに整理したものです。さらにこの手引きを有効に活用していただくためのポイントを5つにまとめました。

(1) まずは「防災教育はどう実践されるのか」全体像を把握しよう

既に防災教育を実践されている方も、あるいはこれから実践しようという方も、まずは全文を内閣府(防災担当)のページからダウンロードしていただき、ご一読いただくことをおすすめします。手引きは防災教育実践を「特定の、誰かができること」から「どの地域の、誰でもできること」にできるよう、作成されています。近年の被災経験地域でも、そうでない地域でも、標準化された防災教育実践手法を確認しておくことが大切です。

(2) 学校関係者など、実践に関わる人に手引きを読んでもらおう

(1)で自ら確認したら、防災教育実践の「担い手・つなぎ手」づくりのきっかけとして、ぜひ近隣の学校関係者や防災関係機関などに手引きを読んでもらいたいと思います。手引きでお伝えしたい大切なノウハウは、自分だけが知っているだけでなく、学校関係者や防災関係機関も理解してより高い効果を発揮します。

(3) 手軽な教材から試しにやってみよう、マネしてみよう

前述の「防災教育実践教材7選」のように、過去の実践事例が豊富にあり、教材としてシンプルなものをまず試してみることをおすすめします。特に「ぼうさいダック」や「うさぎ一家の防災グッズえらび」などは、小学校等で短時間でもできる教材として作成されています。はじめて試してみる教材としては、適当と言えるでしょう。

(4) まずは継続、それからレベルアップ！

防災教育実践五カ条にも書いてありますが「身の丈に合った」実践が重要です。そしてその実践が「継続」できることもまた同じく重要です。(3)のように手軽な教材、あるいは新しく考えた教材やプログラムを、学校や地域の防災教育の場面で何度か実践してから、より高いレベルでの実践を目指してチャレンジしましょう。

(5) 成果は広く発信、学校・家庭・地域に伝えていこう

継続していくためには、一人でも多くの理解者(担い手・つなぎ手)が必要です。実践した成果は広く学校、家庭、地域に伝えていきましょう。防災教育チャレンジプランへの応募や交流会への積極的な参加も効果的です。

4. 防災教育実践のススメ

(1)「いのち(Life)を守る防災教育」を段階的に考える

防災教育の最終的な目標は「いのちを守る」ことです。この「いのち」は「生命」だけを指し示しているわけではありません。もし「生命」を守ることだけが目的だとしたら、発災そのものへの対応だけ徹底すればよいということになります。

ですが、実際には生命を守るだけでは自然災害を乗り越えることはできません。災害から「生き残った」ならば次は「生き抜いて」いかなければならないのです。被災後の避難「生活」など、同じように「生き残った」人たちと力を合わせていくことも重要です。また、自分自身の「人生」において災害をどのように受け止め、生活を再建していくのかについても考えなければなりません。

つまり防災教育で守るべき「いのち」とは「生命」であり「生活」であり、そして「人生」でもあります。これらをまとめると「Life」という言葉になります。

いのち=Lifeを守るための防災教育は、自然災害や安全行動の理解だけでなく、自然の持つ二面性(美しい景観や恵みをもたらす反面、危険もある)や地域特性の理解、他者とのコミュニケーションなど、様々な知識や技能の習得が必要です。これらを小学生、中学生といった決められた発達段階だけでクリアしようとすると、先生や生徒の負担が大きくなりすぎてしまいます。

小学校6年間、中学校3年間に分けて、段階的に必要最低限のことを学べるよう整理することも重要です。

別添資料「9年間を見通した防災計画」

(2)国内外の災害から児童生徒の“いのち”を守るために

災害からいのちを守るために学ばなければならないこと、できるようにならなければならないことは数多くありますが、まずは各学校各地域において、小学校低学年で想定されるような基礎知識や安全行動の理解が徹底されているかどうかを、ご確認いただきたいと思います。

十分な授業時間を確保することが難しい、防災(教育)について専門的な知識を学ぶ機会も限られている、そのような状況だからこそ、シェイクアウト訓練に代表される「必要最低限の防災教育(訓練)」が求められると考えています。手引きには、様々な事例やプログラムも掲載されています。必ず、皆さんの地域にとって参考になるポイントや資料があるはずですが、また、手引きはすべて英訳されており、2015年3月に開催された「第3回国連防災世界会議」において広く国内外に対して発信、国や地域を越えた応用が可能であることが示されています。

災害から児童生徒のいのちを守るために必要なのは、たった1回の防災教育かもしれません。それがどんなに単純な内容であったとしても「児童生徒のいのちを守りたい」という想いで実施した、そのたった1回が、いのちを守ることにつながるかもしれません。

手引きを参考に、ひとりでも多くの方に、あるいはひとつでも多くの地域で、防災教育実践が取り組まれることを願っています。

平成 27 年 6 月 筆者